[株]大阪繊維リソースセンター　セミナー
6月3日［土］

リソースセンターは、1988年に国の繊維ビジョンによって、情報・調査研究・人材育成・展示・交流など、繊維産業の発展と促進とを目的として、全国5ヶ所(今治、大阪、石川、浜松、東京)に設置されました。
特に大阪繊維リソースセンターは、従来の労働集約型の繊維産業から、生活文化提案型産業・大都市機能型産業・アジアのオーガナイザー産業への脱皮を目指すことを目標に設立されました。

当日は、予定されたセミナー開催前の限られた時間内でしたが、ライブラリー・展示室・会議室・プリント室などの施設を見学させていただきました。
その後、研修室において“テキスタイルデザインとは”をテーマに、4人のパネラーの方々による講演及び参加者とのパネルディスカッションを行ないました。紙面に限りがありますので全てをお伝えできないのは残念ですが、以下にその内容の抜粋を掲載させていただきます。

繊維産業の未来とテキスタイルデザイン

［株]大阪繊維リソースセンター　代表取締役常務　新田将規氏

円高に対する繊維産業のあり方として、伝統・文化・歴史を背景にして小規模な企業が相互に連係を取り合いながら、専門化されて生き残ってきたヨーロッパ方式と、原料から製品に至るまでの無駄を省いた量産型指向のアメリカの例とを示したうえで、今後の競争力としては、資源を湯水のように使い捨ててきた“豊かさの時代”の幻影から脱皮し、リサイクルできる繊維の開発が必要であり、物造りする人が品格をもった企業でなければこれからは生き残っていけないだろうと述べた。
またテキスタイルデザイナーにたいしては、前期ルネッサンス頃のフィレンツェの芸術家達の例を上げて、彼らは一つの分野だけの専門家ではなく、様々な分野の専門技術をもったアトリエの出身であり、それが後世に残る数々の作品を生み出したこと。細分化された専門分野だけにとらわれず、デザインの色々な分野(川上、川下、マーケティングなど)をもよく知った上でのテキスタイル企画能力を身に着け、海外にまで広く発言できる力をつけてほしいとの示唆に富んだ意見が述べられた。

ファッションとテキスタイル

旭化成工業［株］　繊維マーケティング部副部長　今須久栄氏

ファッションとは変化する社会現象であり、多くの人に受け入れられ、かつ衰退する運命にある現象であること。それを逸早くキャッチするのが即ちファッション・ビジネスであること。今、求められているテキスタイルデザインとは、最終製品をデザインすることを前提にしたプランニングであり、工業生産による量的販売と利益の追究を伴なったものであること。さらに、その発想には生活者の視点が不可欠であり、常に数字の読めるデザイナーが求められている時代背景についても述べられた。

インテリアとテキスタイルデザイン

［有]フォルムSKR　代表取締役　川上玲子氏

純粋なデザイナーとしての立場から、スウェーデンの女性運動家であるエレン・ケイの“人々は調和のとれた環境に因ってより幸福になる”との言葉を引用し、生活者にとって居心地の良い環境の中に溶け込むデザインの大切さを強調された。
横浜市中央図書館「ステンレス・ファンタジー」を製作されたテキスタイルデザイナーとしての立場から、公共空間におけるテキスタイルとは、アートがあるためにそこに来る人にとって良い雰囲気を提供する必要があること。プライベート空間に於けるテキスタイルとは、(インテリア・ファブリックスとして)それがどのように使われるかにより、使われる時に引き立つものを提供するのが役割であることなどを、スライド映写による自然から得られるデザインのアイデア、調和の取れたスウェーデンのインテリアといった具体例を示して説明された。

建築とテキスタイルデザイン

［株]東畑建築事務所　部長　玉置豊始氏

建築デザインの置かれている状況を述べられる中で、建築は完成したときが終りではなく、その中で何かをすること自体が目的であること。建築家に求められているのは、物のデザインではなく、幅広い視野でデザインアプローチすることであり、人間が生きている全てのことに関心をもっていかねばならないことを主張された。
また、建築から見たテキスタイルの問題点として、上代価格と取引価格の二重構造や、どのメーカーも商品が累計化しており、オリジナリティーがなく、単に西洋のスタイルを日本語に翻訳しているだけであると思える点などを鋭く指摘された。
今後の建築とテキスタイルデザインの関わり方としては、ジャンルを越えた情報の交換を行なうべきであること。建築をよく知ったテキスタイル・コーディネーターが必要とされることを述べられた。

以上が4人のパネラーの方々の講演内容の要約ですが、いずれにも共通しているのはテキスタイルデザインの限定された分野のみにとらわれず、人間として、生活者として、常に幅広く様々な視野からのデザインに対するアプローチを試みることの大切さと必要性を述べられていることであると言える様です。

リポート［平岡美子］